



薬剤耐性対策推進月間について

家畜に使用する抗菌性物質は、疾病の治療を目的とした**動物用医薬品**や飼料中の栄養成分の有効利用を目的とした**飼料添加物**として、家畜の健康を守り、安全な畜産物を安定的に生産するためのものです。

しかし、家畜に抗菌性物質を使用すると、**薬剤耐性菌**が生き残って増えることがあり、抗菌性物質の効きが悪くなることがあります。また、食品などを介して薬剤耐性菌が人に伝播した場合、人の治療のために使用される抗菌性物質が十分に効かない可能性もあります。

そのため11月を薬剤耐性対策月間とし、以下の農林水産省ホームページを参考にして獣医師、生産者、動物用医薬品取扱業者等、関係者が連携して抗菌剤の慎重使用に取り組みましょう。

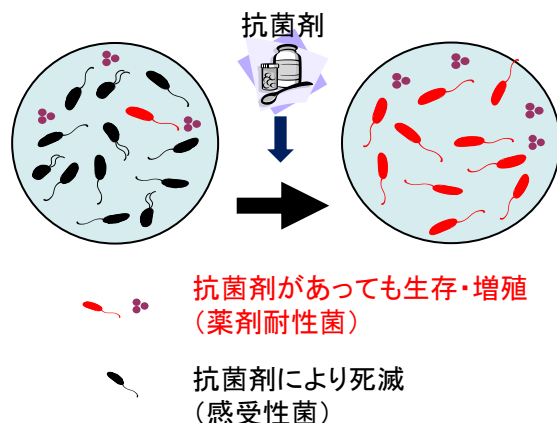
薬剤耐性菌とは？

薬剤耐性菌とは、「抗菌剤が効かない細菌」です。薬剤耐性菌は、抗菌剤の使い過ぎなどにより増加し、人や動物の治療が困難になります。

世界的に、薬剤耐性菌による感染症が増加しており、大きな問題となっています。

そのため、昨年5月にWHOが国際行動計画を採択し、我が国でも、本年4月、今後5年間に取り組むべき対策をまとめた行動計画（アクションプラン）が決定されました。

農林水産省 HPより抜粋



薬剤耐性問題と畜産との関わりは？

抗菌剤は、畜産分野でも、動物用医薬品や飼料添加物として使用されています。

家畜への抗菌剤の使用により増加した薬剤耐性菌が、家畜の治療を困難にするだけでなく、畜産物等を介して、人の感染症の治療を困難にすることが懸念されています。

そのため、アクションプランでは、人の医療分野とともに、畜産分野において必要な取組が記載されています。

畜産関係者が実施すべき対策は？

生産者や獣医師をはじめとする畜産関係者には、薬剤耐性問題を理解し、「抗菌剤の慎重使用」を徹底すること等が求められています。具体的には、

- ① 飼養衛生管理の徹底やワクチンの使用により感染症を減らすことにより、抗菌剤の使用機会を減らすこと。
- ② 抗菌剤の使用を真に必要な場合に限定すること。

が対策の基本となります。



毎年11月は畜産環境月間です

平成16年11月1日の「家畜排せつ物の管理の適正化及び利用の促進に関する法律」施行を機会に、熊本県では11月を畜産環境月間と定めて、畜産環境保全に努めるように呼びかけています。

法に定める管理基準の適用を受ける飼養規模は次のとおりです。

牛及び馬	10頭以上
豚	100頭以上
鶏	2,000羽以上

これらに該当する方は、次の事項を遵守する必要があります。

なお、管理基準以下の経営においても適正に管理することが必要です。

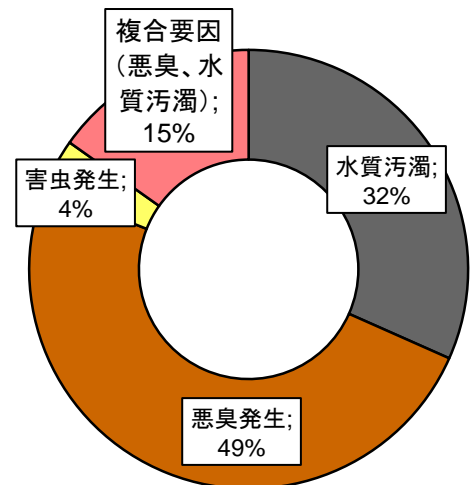
- ◆堆肥・尿処理施設の床を不浸透性材料(コンクリートやビニールなど)で整備し、堆肥施設等には適当な被覆や側壁等を設けること。
- ◆堆肥化処理施設等は定期的な点検、補修、維持管理を行うこと。
- ◆家畜排せつ物の発生量や処理について記録をつけること。

畜産業において、家畜排せつ物の適正な管理は義務であり、地域に理解される畜産経営を目指しましょう。

畜産環境への苦情の半数は、悪臭発生によるものです。悪臭対策は畜舎からのふん尿の早期搬出や畜舎内外の清掃、圃場での散布後の速やかな耕起を行うなど、家畜の飼養・生産に伴う悪臭を防止、低減させる取組が重要です。

県では関係団体と連携して熊本県耕畜連携推進協議会を設置し、家畜排せつ物の適切な管理を通じて生産された、良質な堆肥の情報等を提供するなど、環境保全型農業や耕畜連携を推進しています。

詳しくは、協議会HP「くまもと堆肥ネット」をご参照ください。



畜産経営に起因する苦情発生状況
平成27.7-28.6月 苦情発生件数79件の割合(単位:%)

お問い合わせ先

- お近くの地域振興局農業普及・振興課
- 熊本県耕畜連携推進協議会事務局
096-333-2398(熊本県農林水産部畜産課)
096-328-1025(JA熊本中央会
担い手・法人サポートセンター)

福岡県でイバラキ病を疑う疾病の発生について

平成28年10月17日、福岡県よりイバラキ病を疑う疾病の発生情報がありました。

- ・品 種 肉用種
- ・臨床症状 9月10日頃から育成子牛14頭が発熱（39.5℃～40.9℃）、その後解熱するも、そのうちの1頭が17日から発熱、起立不能、嚥下障害。
9月20日、成牛の複数頭に発熱。
- ・経 過 発熱成牛から*イバラキウイルス（血清型7型）*を分離した。
- ・考 察 ①9月に実施した吸血昆虫媒介疾病発生予察事業（アルボウイルス調査）において、福岡県内全域でイバラキウイルスに対する抗体価の有意な上昇を確認している（17/40頭）。
②今回の事例では、発熱と嚥下障害等が認められましたが、1997年に九州で同時発生した事例（*イバラキウイルス（血清型7型）*）では、同症状に加え死流産も確認されている。

イバラキ病とは？

本病は、夏の終わりから秋期に発生し、*イバラキウイルス（血清型2型）*が媒介昆虫（ヌカカ）により伝播する*アルボウイルス感染症*である。牛から牛への同居（接触）感染はない。

軽度の発熱とともに、食欲不振、流涙、結膜充血・浮腫、泡沫性流涎、鼻腔・口腔粘膜の充血・鬱血・潰瘍、蹄冠部の腫脹・潰瘍、跛行等がみられる。その後、発症牛の約5%に食道麻痺・咽喉頭麻痺・舌麻痺による嚥下障害が発生するといわれている。

生ワクチンあるいは不活化ワクチンの接種（ウイルス流行期前に完了する）により予防し、嚥下障害発症牛に対しては、補液および誤嚥性肺炎の防止のための対症療法を行う。

サーベイランスの一環として、全国的に牛アルボウイルスの動向を調査しており、福岡県だけでなく長崎県及び熊本県でも、*イバラキ病の抗体陽転が確認*されています。

本病を疑うような症状が見られましたら、獣医師及び家畜保健衛生所まで連絡をお願いします。

海外悪性伝染病発生状況

病名	発生地	発生日	畜種	型
高病原性 鳥インフルエンザ	中国 甘粛省	10月2日	家きん	H5N6
	中国 湖北省	10月2日	家きん	H5N6
	台湾	9月28日	家きん	H5N2

11月1日現在

通報

家畜の異常を発見された場合はご連絡ください。
天草家畜保健衛生所 電話番号0969-22-3668

毎月20日は「くまもと家畜防疫の日」

